

『復樂園』と聖書

杉本 誠

『復樂園』における主題が荒野におけるイエスのサタンによるさまさまの誘惑の試練であることは明白である。本来ならば、イエスの贖罪を主題とすべきであったろうが、すでに『失樂園』において贖罪は扱われ、樂園の回復が潜在的に示されている。デイシスは『復樂園』は純粹に神学的な立場から、キリストの受肉と受難によって回復されたが、別の観点からミルトンに関心を抱かせたのは、樂園の回復が第二のアダムであるキリストが誘惑に直面し、それに敗北しないで忍耐するとき可能にされることを指摘している。⁽¹⁾ 従って、ミルトンの描いた樂園回復は、ブッシュも指摘しているように、理想的な人間の理性と意志との典型であるキリストが、アダムの征服者であるサタンを逆に征服するとき回復されるのである。⁽²⁾ そこで小論では、「人間性の代表」⁽³⁾ として「模範的な英雄」⁽⁴⁾ であり、人生の「偉大な模範者」⁽⁵⁾ である主人公イエスが、サタンの執拗な誘惑の試練の中で、ヨブ的な、そして、キリスト的な忍耐の徳に立脚しつつ、節制により厳然と誘惑を拒否し、「神の摂理への全き信頼」⁽⁶⁾ を確信しながら勝利する姿を把握しつつ、ミルトンのこの作品における聖書との関係を探ることにする。

ところでミルトンは、『復樂園』においても『失樂園』の時と同じように、叙事詩の型通りにその主題を開巻冒頭の1行から7行にかけて高らかに唱っている。

I who erewhile the happy garden sung,
By one man's disobedience lost, now sing
Recovered Paradise to all mankind,
By one man's firm obedience fully tried
Through all temptation, and the tempter foiled
In all his wiles, defeated and repulsed,
And Eden raised in the waste wilderness. (I, 1-7)

わたしはさきにひとりの人の不従順によって
樂園が失われた物語を歌ったが、
今度は、あらゆる誘惑をとおして、
ひとりの人の確固たる従順が十分に試され、

誘惑者はすべての計略を見破られ、
 打ち負かされて、追い払われ、
 樂園が不毛の荒野につくられたことを歌う。

この数行が「ローマ人への手紙」第5章19節の「ちょうどひとりの人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、ひとりの従順によって多くの人が義人とされるのです」のことは背景にしていることはいうまでもない。ブッシュはこの初めの数行は、アダムの墮落の物語が第二のアダムへの続編を招き、彼の十分に試みられた確固たる従順が荒野における魂の新しい樂園を起こしたと解釈している。⁽⁷⁾

ミルトンは『失樂園』では冒頭26行をインヴォケーションに費しているが、『復樂園』においてもウェルギリウスの『アエネーイス』の冒頭に従い、短い叙事詩とはいえ叙事詩の作法により、17行をインヴォケーションに費している。ニコルソンも冒頭17行は、『失樂園』に戻って言及することによって始まり、確かに聖霊への祈りがあることを明示している。⁽⁸⁾ とくに、「この誉れ高い聖者を荒野に導き、靈的な敵に勝利し、真に神の子としてのあかしをもって、その地から連れかえった聖霊よ、いつものようにわたしの歌に靈感を与えよ」(I, 8-11)は、詩神に向かって敬虔な祈りをささげるミルトンの姿を思いうかべることができる。

ミルトンは『復樂園』の目的を「英雄にもまさるあの行ないを語らして下さい」(I, 14-15)と宣言しているが、『失樂園』においても、真にヒロイックであることは、「忍耐のよりよき勇氣と、英雄的受難」(IX, 31-32)であることが強調されていることからして、当然、英雄詩としての『失樂園』を頭に置きながら、この作品も英雄詩として読まれるように構想している。ここで注意しなければならないことは、われわれが『復樂園』を読む場合、17世紀の市民革命という動乱の時代に生きたミルトンの姿を思いうかべ、とくに王政復古以後の逆境に生きるミルトン自身の心の中に、忍耐の占める部分がいかに大きかったかを知ることである。忍耐の美德は『失樂園』においては、アダムが天使ミカエルからその意味を教わったにすぎず、十分に展開されなかった。この忍耐を試す場は、樂園を去ってからあとのことである。この大作に続いて『復樂園』と『闘技士サムソン』を口述しなければならなかった真の理由は、まさに世における忍耐のたたかいという主題を選んだ場合、ミルトンは荒野におけるキリストの誘惑くらい適切な場面設定は他にないまいと考えた。「マタイによる福音書」第4章、「ルカによる福音書」第4章に、その場面の原型がみられる。その場面設定のほかに、もうひとつミルトンが聖書から用いたのは「ヨブ記」の主人公ヨブの姿であり、忍耐の象徴であるヨブの姿が荒野におけるキリストの姿を規定している。

this man born and now upgrown,
 To show him worthy of his birth divine
 And high prediction, henceforth I expose
 To Satan; let him tempt and now assay
 His utmost subtlety, because he boasts
 And vaunts of his great cunning to the throng
 Of his apostasy; he might have learnt
 Less overweening, since he failed in Job,
 Whose constant perseverance overcame
 Whate'er his cruel malice could invent.
 He now shall know I can produce a man
 Of female seed, far abler to resist
 All his solicitations, and at length
 All his vast force, and drive him back to hell,
 Winning by conquest what the first man lost
 By fallacy surprised. (I, 140-55)

こうして生まれて今や成長したこの人（イエス）を、
 ここでサタンの前につれ出し、この人が神聖な誕生と
 気高い預言にふさわしい人物かどうかを示そう。
 サタンに誘惑させ、いまこそ無類の狡猾さを試させよう。
 叛逆天使の群れにむかって、
 彼の悪知恵を威張って自慢するのだから。
 サタンはヨブに失敗してからは、
 前ほどのうぬぼれかたをしなくなったかもしれない。
 ヨブの堅固な忍耐は、
 サタンの残酷な悪意がたくらむものを、すべて打ち負かした。
 いまこそ、ヨブ以上に、サタンの誘惑と絶大な力に抵抗し、
 そして最後には彼を地獄へ追い返し、
 かつて最初の人（アダム）が謀略に圧倒され失ったものを
 征服によって勝利できる人を
 わたしが女の子孫から産み出せることを
 サタンに知らしめねばならない。

『復樂園』が「ヨブ記」を意識して書かれていることは、第1巻における上記のような神のことばからも明らかである。イエスに対するサタンの誘惑が、「おまえはわたしのしもべヨブに心を留めたか。彼のように潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっている者はひとりも地上にはいない」（「ヨブ記」第1章8節）というヨブの試練とパラレルに置かれている。

また、『復樂園』の内容が主として、イエスとサタンとの対話から成り立っている点も、「ヨブ記」が主としてヨブとその三人の友人たちとの対話から成り立っていることと無関係ではない。サタンの誘惑は、多彩なことば「説得力のある雄弁」（IV, 4）を主要な道具にして誘惑するが、神の子イエスは偉大な伝統的な人物として傑出しており、模範的な英雄として中心的なルネッサンス型の英雄であり、徳の「完全なあるべき姿」⁽⁹⁾として、あらゆる条件を満たす人物であるからして防禦も完全である。

『復樂園』における誘惑は、福音書に記されているパンの誘惑、高い山における王国の誘惑、塔の誘惑の三つの誘惑によってわくづけられている。この誘惑は、ミルトンの時代のプロテスタント神学において、それぞれ、「肉の必然性」による誘惑、「世の欺まん」による誘惑、「サタンの暴力」による誘惑、と理解されていた。⁽¹⁰⁾さらに、この三つの誘惑が、「ヨハネの第一の手紙」第2章16節の「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです」という、「肉の欲」（暴食）、「目の欲」（虚栄）、「暮らし向きの自慢」（貪欲）に相当すると考えられていた。⁽¹¹⁾

ミルトンが同時代のこの神学に無関心でなかったことは、神が御子についてガブリエルに語る次のことばをみれば明白である。

His weakness shall overcome Satanic strength
And all the world, and mass of sinful flesh. (I, 161-62)

彼の弱さがサタンの強さ、全世界を、
そして罪の肉の力を、征服するであろう。

この神のことばが、「サタンの暴力」、「世の欺まん」、「肉の必然性」の存在を指示していることは明らかである。

しかし、ミルトンは、この三つの誘惑の中で、とくに第二の誘惑である「世の欺まん」、つまり王国の誘惑を中軸にすえた構成をとった。第2巻302行から第4巻393行までの、『復樂園』の主要部分がこれにあてられている。その前後にある第一の誘惑、第三の誘惑は、いわば導入部と結論部をなすものである。

さて、第一の誘惑は、「マタイによる福音書」と「ルカによる福音書」のいずれも第4章1節

から4節の記事に基づいている。イエスは40日40夜荒野で断食するが、そのために飢えているところへ年老いた農民の姿をしたサタンが来て、

But if thou be the Son of God, command
That out of these hard stones be made thee bread;
So shalt thou save thyself and us relieve
With food, whereof we wretched seldom taste. (I, 342-45)

しかし、もしあなたが神の子であるならば
これらの堅い石からパンを作らせるように命じて、
あなた自身を救うとともに、めったに味わえない
食物で私たちも救っていただきたいものです

という。これが第一の誘惑である。だが、イエスは、

Man lives not by bread only, but each word
Proceeding from the mouth of God; who fed
Our fathers here with manna; (I, 349-51)

人はパンだけで生きるのではなく、この土地で、
私たちの祖先をマナで養って下さった神の口から出る
一つ一つのことばによって生きると、記されているではないか

と語り、サタンの狡猾な論理に終始厳然として対立する。第一のパンの誘惑は、伝統的には「肉の必然性」による誘惑と考えられてきたが、プロテスタントの間では、神不信への誘惑と見なされるようになった。ミルトンもまたイエスをして、「わたしが誰であるかを知りながら、なぜわたしの心に不信の念を植えつけるのか」(I, 355-56)といてサタンを斥けさせているところを見ると、カルヴァンを初めとするプロテスタント神学者たちの解釈に従っていると考えられる。

しかし、パンの誘惑くらいではイエスの忍耐はくずせるものではないことを知ったサタンは、もっと本質的な誘惑を思いつく。彼はイエスが、この地上で「英雄的行為」(I, 216)や「偉大なるわざ」(II, 112)を意図していることを知っている。彼はまたイエスが、「もっとも偉大なるわざ」を達成するだけの「心の広さ」(amplitude of mind II, 139)を求めていることをも知っている。イエスのもつこのような英雄的な願望を、サタンが逆に利用して、イエス誘惑の手段としないはずがない。

そこで、サタンは饗宴と富と栄光とをイエスのために用意する。では、これらの誘惑の過程を追ってみることにしよう。

まず第2巻では、サタン等の会議が開かれ、そこではビーリアルが女性をもって誘惑することを提案するが、サタンはそれを拒む。こうした人間の最も基本的な要求を手がかりとしての誘惑が試みられた後に、饗宴と富と栄光の誘惑が来る。このひとつながりの誘惑は、第二誘惑部の前半を成すものである。要するに「神のごとき」王者にふさわしい境遇を、イエスに提供しようとしているのである。

まず最初に豪華な饗宴の誘惑が来る。

That fragrant smell diffused, in order stood
 Tall stripling youths rich-clad, of fairer hue
 Than Ganymede or Hylas, distant more
 Under the trees now tripped, now solemn stood
 Nymphs of Diana's train, and Naiades
 With fruits and flowers from Amalthea's horn,
 And ladies of the Hesperides, that seemed
 Fairer than feigned of old, or fabled since
 of faëry damsels met in forest wide
 By knights of Logres, or of Lyonesse,
 Lancelot or Pelleas, or Pellenore;
 And all the while harmonious airs were heard
 Of chiming strings, or charming pipes and winds
 Of gentlest gale Arabian odours fanned
 From their soft wings, and Flora's earliest smells. (II, 351-65)

豪華な食器棚の芳香をはなつ酒のそばに、
 ガニミードやハイラスよりも美しい
 背の高い若者たちが美しい色合いの装いをこらし
 列を正して立っていた。はるかかたには、
 木の下にダイアナに従うニンフや
 アマルティヤの角笛から果物や花を持った妖精や
 ヘスペリデスの娘たちが、ときには踊ったり、
 ときには厳肅に立っていた。そのさまは

古い物語が伝えている、ログレス地方や
 リオネス地方の騎士たち、あるいは
 ランスロット、ペレアス、ペレノアたちが
 広い森で会った美しい乙女たちにもまさっていた。
 その間じゅう鳴りひびく弦と魅惑的な笛の
 調和した歌曲がきこえていた。かすかな
 風が柔らかな翼からアラビアの香りと
 早春の花の匂いを漂わしていた。

みずみずしいばかりの官能的な感覚の世界の誘惑がここに表現されている。これはかつてコウマスが肯定した世界である。しかし、断食しているイエスは、「私の飢えとおまえとどんな関係があるのか。私はおまえの豪華な御馳走をいやしめ、見かけだけの贈り物を贈り物でなく奸計と考える」（Ⅱ、389-91）と言って厳しく戒める。サタンは饗宴の次には富という要素を抽出し、「富は名誉、友人、征服と王国をもたらす」（Ⅱ、422）と誘惑する。さらに、「あなたが大事の遂行を願うなら、まず富を得て財をつかみ、宝をつむがよい。私のことばをきいて下されば、それも容易です。財宝も幸運も私の手中にあるのだから。有徳の人、勇者、賢人が困っていても私が支持すれば、その人は大いに富み栄えます」（Ⅱ、426-31）とサタンの高慢な富への賞賛とイエスを服従させようとする奸計とが表現される。だが、イエスは忍耐強く

Extol not riches then, the toil of fools,
 The wise man's cumbrance if not snare, more apt
 To slacken virtue, and abate her edge,
 Than prompt her to do aught may merit praise. (Ⅱ, 453-56)

富を賛美してはならない。富は愚かな者には罣であり、
 賢い者には罣でなくても、厄介物である。
 富は賞賛に値する業を成すよう徳を励ますよりも
 これを緩慢にし、鋭さを鈍らすものだ

と答えて、富の誘惑を敢然と拒否する。イエスは、ストア的な克己の理想を説き、

For therein stands the office of a king,
 His honour, virtue, merit, and chief praise,

That for the public all this weight he bears.
 Yet he who reigns within himself, and rules
 Passions, desires, and fears, is more a king;
 Which every wise and virtuous man attains: (II, 463-68)

なぜなら、民衆のすべての重荷をわが重荷とし、
 これを負うのが王者のつとめであり、
 これが王者の名誉、徳、功績、賞賛となる。
 なお、自己の内面を支配し、激情と欲求と恐怖を
 克服する者こそ、王者というに相応しい。
 これがすべての賢くて、有徳な人が到達するところである

と王者のつとめを高らかに唱いあげる。これらのことばの中に、われわれはイエスに投影されるミルトンの姿と、また、ミルトン自身、行動を起こす前に、「自らの精神を支配しなければならない」⁽¹²⁾ という思想を掲げていたことをみることができる。さらに、王者として相応しいつとめを、次のように説く。

But to guide nations in the way of truth
 By saving doctrine, and from error lead
 To know, and knowing worship God aright,
 Is yet more kingly, (II, 473-76)

だが、救いの教義によって、国民を真理の道へ導き、
 過失から遠ざけて神を知ることに導き、
 神を知って、神を正しく礼拝することが、
 王者らしいことである。

これらのことばは、ミルトン自身、幻滅を感じた晩年において、聖書に基づく謙遜な信仰と礼拝の実践こそ、真に価値ある尊いものであるという彼の確信を示している。

第3巻は、サタンの王国を支配することによって可能な名声ないし栄光の誘惑で始まる(III, 25-30)。だが、イエスの応答はサタンの誘惑に惑わされず平静になされる。

Thou neither dost persuade me to seek wealth

For empire's sake, nor empire to affect
For glory's sake by all thy argument.
For what is glory but the blaze of fame, (Ⅲ, 44-47)

おまえがあらゆる議論によって
私を説得して国のために富を求めさせることも、
栄光のために国を手に入れさせることもできない。
栄光は名声に伴う輝きにすぎないから。

そして、真の栄光とは、

This is true glory and renown, when God,
Looking on the earth, with approbation marks
The just man, and divulges him through heaven
To all his angels, who with true applause
Recount his praises; (Ⅲ, 60-64)

これが真の栄光と名声である。神が
地上をながめて正しい人を認めて賞し
彼を天国の全天使たちに知らせ、
彼らが真の拍手をし、
賞賛をくり返すときこそ。

イエスは、「地上の栄光は偽りで、常に栄光に値しない人と、名声に値しない人に与えられている」(Ⅲ, 69-70) ことを指摘しながら、天における真の栄光と地上的な偽りの栄光とを峻別している。この誘惑の過程においてイエスは、ますますヨブの姿に接近する。彼はサタンに対して、逆境において

who best
Can suffer, best can do. (Ⅲ, 194-95)

もっともよく
耐えるものこそ、もっともよく為し得る。

と告白するにいたる。

次いで、サタンはイエスを高い山へ連れていく（Ⅲ，252）。これ以下がこの叙事詩の第二誘惑部の後半である。山の上でイエスは、古今に強大な国を見せられる。サタンがイエスの愛国心に訴え、アッシリアをはじめ諸王国の、とりわけパルティア王国（Ⅲ，362-85）の武力を示して、イエスの使命であるイスラエルの解放を勧めるが、イエスはすべてに潮時があつて、神の摂理に委ねるとしてこのことを拒否する。誘惑の面ではサタンが口火を切りながら、実は逆に牛耳られていくのである。

第4巻では、サタンは単に辺境の一王国ではなく、豪華絢爛たる世界帝国ローマの政治的威光を見せる（Ⅳ，44-66）。外面的な価値をもつ語、特に視覚語を多用しながら、延々とローマの様子を描く。まさに、内面的価値に目を向けるイエスと皮肉な対照をなしている。そして、サタンは、「老いて、なお好色な恐ろしい欲情をひそかに満足させようと」（Ⅳ，90-94）している淫蕩なローマ皇帝ティベリウスを「王座から放逐し、代わって王位につかれ、国民を奴隷の軛から解放して勝利者」（Ⅳ，100-02）にあなたは私の助力でなることができ、「私にはその力があり、私の特権でそれを差し上げます」（Ⅳ，103-04）と大胆にイエスを誘惑する。しかし、イエスはひるまず、「この壮観とあたりを払う王者の栄華は、豪華といえようが、まえの武器と同様に私の眼を惑わすことはありえない。わたしの心はなおおさらだ」（Ⅳ，110-13）と厳しく答える。さらにサタンが、「もしあなたが跪いて、私をあなたにまさる主としてあがめ、やさしいことですが、すべてのものをわたしの臣下として認める」（Ⅳ，166-68）なら、即ち、自分を崇拜するという条件で世界の王国を与えようと言ったのに対して、「軽蔑して」（Ⅳ，170）答える。このような誘惑が、ヨブの人格に接近したイエスには誘惑たりえないことを、サタンが察知するには、時間がかからない。しかも、こうした誘惑は、「ルカによる福音書」の第4章5—8節に基づいており、もちろん、ミルトンの創意が加えられているとはいえ、聖書の占める重さはなお大きいといえる。以下イエスの発言には感情を表わす語が多くなる。神によって与えられたものを神の子である私に、不敬な条件をつけて与えようとは何事だと言って、今やお前の姿は、「永久に呪われたサタンの正体を現わした」（Ⅳ，193-94）と決めつける。一方、サタンの発言は、言語的ドラマともいふべき彼の知的側面が際立つ。

サタンはここでイエスにとっての最大の誘惑を考える。イエスは世俗の王には関心がなく、知恵にすぐれているから知恵で有名になれと奨める。

Be famous then

By wisdom; as thy empire must extend,

So let extend thy mind o'er all the world,

In knowledge, all things in it comprehend.

(Ⅳ, 221-24)

それから知恵によって有名になれ。

あなたの国が広がらなければならないように
あなたの心を知識で全世界に広げ
すべてのものをその中で理解させなさい。

さらに、サタンは、「モーセの五書や預言書の中にすべての知識が含まれているとは限らない。異邦人もまた神の啓示によってではなく、自然の光に導かれて、驚くほど物を知り、書き、教えている。あなたは希望通り、説得によって異邦人を支配しようと思うならば、彼らと大いに論じ合わなければならない。だが、彼らの学問を知らなければ、どうして有効な対話ができようか。彼らの偶像崇拜、因習、逆説を論破するためにも彼らの学問を知らなければならない。誤謬もそれ自身を知ることによって最もよく征服できる」(IV, 225-35) と、悪の知恵と知識を駆使して、サタンはイエスに語る。

そのうえ、サタンはアテネの学芸とその流れを語りながら、

Athens the eye of Greece, mother of arts
And eloquence, native to famous wits
Or hospitable, in her sweet recess,
City or suburban, Studious walks and shades; (IV, 240-43)

あれはギリシアの眼、芸術と雄弁の母、
有名な学者の故郷アテネで、
快い静かなところへ客を歓待する都市で、
市内にも郊外にも向学心を誘う散歩道や木陰があります

と、ギリシア文化の賛美をする。そして、ソクラテス、プラトン、アリストテレス、エピクロス、ストア、抒情詩、叙事詩、悲劇、雄弁と、ギリシア文化の本質が列挙される。これらは、まさに、サタンの誘惑ではなく、ミルトン自身のギリシア賛歌を聞いているような気がする。誘惑らしいものはどこにも感じられない。だが、サタンは、イエスに、ギリシアの哲学を学べば、「あなた自身の内面において完璧な王者となるでしょう」(IV, 283-84) と語る。サタンの真意は、ギリシア文化が教える知恵と雄弁を活用して、「説得」(persuasion IV, 230)によって、世界を制覇することを教唆しているのである。イエスはそれに対して、自己の内部に閉じこもらずに、常に自己を開いて、「天なる光の泉から光を受け入れる者」(IV, 288-89) でなければならないと説く。人は自己の内面において完全になることはできない。もしできると思うならば、それは最大の傲

慢である。とりわけストア学派はこういう罪に陥った。彼らの有徳な人は「徳と呼ばれた哲学的
高慢から、恥知らずにも、たびたび神と等しく完全に全能の賢者を神の上におき、神も人も恐れ
ず、富も快樂も、苦しみも痛みも、生も死も、あらゆるものを軽視する」(IV, 300-05) のである。
さらに、彼らは「自らを知らず、まして神を知らず」(IV, 310)「魂について大いに語るが、しか
し、すべて誤っている」(IV, 313) というわけである。だから、「このような学問に真の知恵を求
める者は、英知を見出さない」(IV, 318-19) と語る。しかるに、イエスは無用の知識を排して、
神の啓示による知恵のみが真に大切であると説く。ギリシア人が知識のために知識を追求してい
る様子は「海辺で小石を集める子どものように立派な物と思って、海綿のようにつまらない物を
集めている」(IV, 329-30) のだと見抜く。

さて、サタンは星判断によりイエスの死をも予言して (IV, 388) 彼を荒野に連れ戻す。激しい
嵐と奇怪な悪霊がイエスを襲う。弱いイエスへのあわれみが印象づけられるが、弱いが故に一層
彼の平静さが強調される。夜が騒げばそれだけイエスの静けさと沈黙が、その信仰の深さを語る。
イエスは嵐を鎮め、悪霊を追い払う。信仰と沈黙の勝利である。イエスはここに至ってはじめて、
揺ぎない信仰に支えられ、全存在を神に委ねた上で、沈黙が力を発揮する。

ill wast thou shrouded then,

O patient Son of God, yet only stood'st

Unshaken; nor yet stayed the terror there:

Infernal ghosts, and hellish furies, round

Environed thee, some howled, some yelled, some shrieked,

Some bent at thee their fiery darts, while thou

Sat'st unappalled in calm and sinless peace. (IV, 419-25)

ああ、忍耐強き神の子よ、

その時、あなたは身を避けるところもなく、

ただ身じろぎもせず立っていた。脅威はそれとどまらず、

地獄の悪霊と恐ろしい怨霊があなたをとりまき、

吠え、叫び、わめき、

火の槍をあなたに投げつける者もいたが、

あなたは少しも恐れず、おちついて汚れない平静を保たれた。

この言葉の中に、イエスはサタンの悪の誘惑に決して屈することのない神の子であり、「忍耐
のキリスト」であるという認識と主張を感じることができる。従って、第三誘惑部のサタンによ

る暴力の試みなどは、もう問題にはしない。だが、サタンはイエスが神の子というなら、自分もそうだと思っていたのに、イエスが征服者のように自分を奴隷視するので激怒する(IV, 499)。同時に、イエスがサタンの宿命の敵であると断定する(IV, 525)。サタンにとってイエスは、「あらゆる誘惑に対して非常に堅固な岩のように不動で、地球の中心のように強固であり、賢くて、善良な人間の中で、最高に位するが、それより優る者ではないことがわかった。今までにも、名誉や富や王国や栄光などをしりぞけた人があったし、今後もあるだろうから。そこで、あなたが人より優る神の子として、神の声で呼ばれるほどの価値をもっているか」(IV, 532-39) どうか、残る手段は、イエスの神性を確かめることであると言う。かくして、サタンはイエスを「聖なる都、美しいエルサレム」(IV, 544-45) に連れて行き、一番高い尖塔の上にのせ、軽蔑の口調で、「立てるなら、そこに立ちなさい。あなたでもそこに立つには技がいるでしょう。私はあなたを、あなたの父の家に連れて来て最高の場所においた。最高は最上である。さあ、あなたの血統を示しなさい。もし立てないなら、身を投げてみなさい。もし神の子なら、無傷のはず。神は天使たちに命じて、あなたの足が石で打ち砕かれないように、いつでも手をのべて支えさすであろうと記されているから」(IV, 551-59) と誘惑する。これに対してイエスは、「あなたの神である主を試みてはならない」(IV, 561) と「ルカによる福音書」第4章12節の教えに、すべてを委ねることによって長い誘惑に終止符を打つことになる。

ミルトンはイエスに、パン、女色、饗宴、富、名声、地上の王国の支配、ギリシア哲学など、あらゆるタイプの誘惑にあわせ、正しい克服の道を実践させ、そして正しい範例をわれわれの前に明示したのである。また、真の英雄とは、平和な隣国を戦争で掠奪し、殺戮することが英雄的行為ではなく、かえって、苦難に耐えたヨブや、真理のために不当な死を蒙ったソクラテスこそ、真の英雄(III, 71-99) なのだという。ステッドマンによれば、ミルトンは英雄像のコペルニクス的転換をおこなったのである。⁽¹³⁾ 従って、「もっともよく耐えるものこそ、もっともよく為し、もっともよく従ったものこそ、もっともよく治める」(III, 194-96) ことになる。この作品のイエスは、「謙遜と強き忍耐によって、罪と死を征服する」(I, 159-60)。このキリストの像が晩年のミルトンの姿と合致する。おのれの人生をふりかえり、ヨブ的な、そしてキリスト的な忍耐の徳に立脚しつつ反省するミルトンの姿を見ることができる。

『復樂園』においてイエスが試みられた誘惑の試練は「情欲に対する理性のたたかい」⁽¹⁴⁾ であり、究極的には、「靈的なたたかい」⁽¹⁵⁾ であるが、イエスは「靈的な真理」⁽¹⁶⁾ を武器にサタンの挑戦をみごとに否定したのである。ブッシュによれば、「ミルトンの英雄は、神にある謙遜と従順な信頼によって導かれ、強められ、意識的な理性の力を通じて悪を厳しく撃退したのである」⁽¹⁷⁾ と力説している。イエスのとどまるところは、「神の摂理への全き信頼」⁽¹⁸⁾ であり、「謙遜な信仰と従順こそ第二のアダムの顕著な徳」⁽¹⁹⁾ なのである。

イエスの勝利は、ハンフォードのいうように、「節制の勝利であり、欲望を制する理性の勝

利」⁽²⁰⁾であるが、「何か神性を帯び、人間性を超越して高揚され」⁽²¹⁾内なる光の輝きによって導かれ、「神の摂理と導きによる従順な神への信頼」⁽²²⁾という聖書の基盤の上に立って、すべての世の賞賛を拒否し、勝利したといえよう。

(注)

- (1) David Daiches, *Milton* (New York, 1966) 216.
- (2) Douglas Bush, *The Renaissance and English Humanism* (Toronto, 1958) 119.
- (3) J. H. Hanford, *A Milton Handbook* (New York, 1961) 270.
- (4) E. M. W. Tillyard, *Studies in Milton* (Chatto & Windus, 1964) 100.
- (5) M. H. Nicolson, *John Milton: A Reader's Guide to His Poetry* (New York, 1963) 328.
- (6) Douglas Bush, *English Literature in the Earlier Seventeenth Century* (Oxford, 1962) 414.
- (7) Bush, *John Milton* (New York, 1967) 182-83.
- (8) Nicolson 333.
- (9) Tillyard 100.
- (10) E. M. Pope, *Paradise Regained: The Tradition and the Poem* (New York, 1962) 162.
- (11) Pope 163.
- (12) Tillyard 256.
- (13) J. M. Steadman, *Milton and the Renaissance Hero* (Oxford, 1967) v-vii.
- (14) Tillyard 225.
- (15) A. E. Barker, *Milton: Modern Essays in Criticism* (Oxford, 1965) 434.
- (16) Hanford 278.
- (17) Bush, *English* 413.
- (18) Bush, *English* 414.
- (19) Bush, *John Milton* 185.
- (20) Hanford 276.
- (21) Don Cameron Allen, *The Harmonious Vision* (London, 1970) 119.
- (22) Bush, *John Milton* 187.